

## ゲティアー、誤信念課題、理由の空間

### ——自然主義的認識論のある具体的プログラム——

水本 正晴

概念分析というアプローチと自然主義とは矛盾しない。本稿は、それを具体的に示すような、自然主義的認識論に基づくある研究プログラムを提案する。まず、ノツィックの知識の定義の再構成から、「理由の空間」という概念に基づく知識の分析を提案し、次に発達心理学における誤信念課題を、認識論のゲティアー問題と結びつけ、後者を前者に類比的な課題として再構成するとともに、それらを使って発達段階についての経験的仮説を提示する。子供の知識概念の使用についての経験的データから、これが十分遂行可能な課題であり、またそれが子供の「理由」の認識能力と関わってくること、さらに誤信念課題も同様の観点から捉え直すことができること、を確認した後、それらを踏まえ発達心理学的観点から「理由の空間」の発展段階を概念的・経験的に探求する研究プログラムを提案する。これは知識概念を自然化するとともに、発達心理学、認識論、人工知能を有機的に結びつける一つの学際的研究パラダイムを構成することになる。

#### 1. ノツィックの知識の定義と理由の空間

先ごろ亡くなったロバート・ノツィックは、彼の(1981)において以下のような知識の定義の提案を行った<sup>1</sup>：

S knows that p iff

- (1) p is true.
- (2) S believes that p.
- (3) not-p  $\Rightarrow$  not-(S believes that p)
- (4) p  $\Rightarrow$  S believes that p.

これら4つの条件は、しかし、たった一つの文で表すことができるように思われる。

- (5) (S believes that p) *because* p.

というのも、まず第一に、条件1と2は「P because Q」の真からPとQの真が導かれるように、(5)によってトリヴィアルに満たされ、第二に、条件3と4は“because”関係によって正しく反映されており、例えば(3)あるいは(4)を満たさないどのような(ゲティアー的)例に対しても、我々は「その場合、p ゆえに Sはpと信じているというよりは、…ゆえにそう信じていると言うべきであろう」といった具合に代替的な理由を挙げることができるだろうからである<sup>2</sup>。実際例えば信念pについての決定的証拠qを持ち、それゆえにSはpと知っている、と言えるような状況においては、(qゆえにSはpと信じる、ばかりか)qがpの決定的な証拠である限り、q自身について、pゆえにq、という関係が成立していなければならないだろう(例えば指紋が殺人の決定的証拠であるとき、彼が殺したゆえにそこに指紋があったのである)。従って「ゆえに」が推移律を満たす限り、ここで我々は、pゆえにSはpと信じている、と結論することができる<sup>3</sup>。

ノツィックのこの知識の定義は、一般に、知識の主体自身が(3)や(4)の関係が成立していることを認識する必要がない、という意味で外在主義的なものであり、それゆえ自然主義的アプローチに親和的なものと見なされている。だが、この定義は少々強すぎるように思われる。

よく知られるように、実はノツィックは、条件(3)、(4)のため、パトナムの「桶の中の脳」という懐疑に対し、我々は桶の中の脳ではないということを知らない、と認めてしまう。というのもたとえ我々が桶の中の脳であつたとして

も、我々は（今まで通り）自分たちは桶の中の脳ではない、と信じ続けるだろうからである。

この事実は確かに条件(3)を満たさないが、実は、必ずしも条件(5)は否定されるわけではない。「ゆえに」の強い解釈においては、そのような反実条件をも満たさなければ(5)は成立しないであろうが、十分弱い解釈においては、その関係は現実世界で成立していれば十分なのであり、その場合、この（現実）世界で我々が桶の中の脳でない限り、「我々は、自分たちが桶の中の脳でないと信じているのは、実際我々が桶の中の脳でないからに他ならない」（すなわち  $p$  ゆえに  $p$  と信じている）と正当に言うことができるだろう<sup>4</sup>。

残念ながら、ノツィックの(3)、(4)は、明示的に反実条件にコミットしており、こうした弱い解釈を許さない<sup>5</sup>。だがだからこそ私は、ノツィックが(1)から(4)を要求した背景には、あるいは少なくとも我々にそれが一見説得的に見えるのには、直観として(5)があるのではないかと考えている。

もちろん、このような「ゆえに」の関係は、たとえそのような弱い解釈であっても非外延的なものであり、この関係そのものがより詳しく分析されない限り、認識論者は(5)による知識概念の分析に満足しないであろう（そのような「ならば」は直説法的条件文によって分析される関係であるが、私はそれに関してはここでは触れない）。しかし、それでも(5)は認識論に対し重要な洞察を与えるものである。というのも、これが示唆するのは、この「ゆえに」で結ばれたネットワーク、マクダウェル＝セラーズの用語で言えば「理由の空間」が、我々の知識概念に暗黙のうちに前提されている、ということであるからである。このことは、第3節でより具体的に見ていくことになるが、次の節ではまずそのための準備として、子供の知識概念の発達についてある経験的仮説を構成してみたい。

## 2. 誤信念課題からゲティアー課題へ

発達心理学における誤信念課題とは、以下のような状況設定から始まる。

- (i) サリーがチョコレートを箱に入れて部屋を出る。
- (ii) その間アンが入ってきて、(サリーを困らそうと) チョコをバスケットに入れ替える。

ここでサリーが戻ってくる。

質問 1: サリーは (チョコを取ろうとして) どこを探す?

多くの3歳以下の子供や自閉症児は、ここでサリーが(箱でなく)バスケットを探すだろうと答えることが知られている<sup>6</sup>。それに加えてここでは、次のような質問を試みよう。

質問 2: サリーはチョコがバスケットにあると知っていますか?

もちろんこの質問は、それが「知っている」のような認識論的に問題となる語を質問の中で使っている、という意味で少々問題がある。だが、子供の「知っている」の使用に関しては以下に見るとして、ここではまず、さらなる別の状況を考えてみたい。すなわち、(ii)の後、サリーが戻ってくる前にさらに、次のようなことが起こったとしよう。

- (iii) トムが入ってきて、チョコをバスケットに見つけ、(サリーを困らそうと) チョコを箱に移す。

ここでサリーが帰ってくるとする。このとき、

質問 3: サリーはどこを探す?

という問いには、質問 1 で「バスケット」と答えた子供でさえ「箱」と答えるはずであろう。すなわち、この質問の答えは、「心の理論」を持っていてもいなくても、同じものに落ち着くように思われる。だが、

質問4: サリーはチョコが箱に入っていると知っていますか？

という問いに、子供はどう答えるだろうか。

実はこれは、良く知られている「ゲティアー問題」に対応する状況である<sup>7</sup>。したがって、大人の直観ではここでサリーは「知らない」という答えが正しいと思われる。これはサリーの信念が単に偶然的に真であるからである。だが、もし質問2に「はい」と答える子供たちであれば、質問4にも当然「はい」と答えるのではないだろうか。従ってここで、「いいえ」という答えを暫定的に正解とすれば、このテストは「ゲティアー課題」と呼ぶことができよう。

子供がこの「ゲティアー課題」をパスすることができるかどうか、そのためにはどのような能力が要求されるのか、に関しては、他の質問との関連を見るのが近道であろう。

ここで可能な答えの組み合わせとして、以下の表を見てみよう。ただし質問1、3に関しては「箱」と答えることを○、「バスケット」と答えるのを×としており、質問2、4に関しては、「いいえ」という答えを○、「はい」という答えを×としている。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
質問1	×	×	○	×	○	○	×	○
質問2	×	×	×	○	○	×	○	○
質問3	×	○	○	○	○	○	○	○
質問4	×	×	×	×	×	○	○	○

これらはすべての組み合わせを尽くしているわけではないが、それは①のような、質問3が×であるような選択肢が、ここでは予め排除されているからである。その可能性を排除するのは、それが不可能だから、というわけではなく、我々は今ここで経験的仮説を構成しようとしているのであり、そもそも質問3の状況で、サリーがバスケットを探す、という答えがいかなる想定から出てくるのか考え難く、たとえそのような答えが実際にあったとしても、それがここ

で問題となるような理由によるわけではないだろうからである。

だがもしそうならば、同様に、我々は③も無視してよいだろう。質問1に正しく答える、すなわちサリーはチョコが箱に入っていると信じている、と思う子供が、質問2に「はい」と答える、すなわちサリーはチョコがバスケットに入っていると知っている、と判断するとは考え難いからである（同様の理由から、⑥の選択肢が除外される）。

では逆に、④や⑦のように、質問1に正しく答えられないが、質問2に「いいえ」と正しく答える、という組み合わせはどうであろうか。そのような子供は、「知っている」という述語に、特に強い注意を払っているように思われる。少なくとも、質問1に「バスケット」と答えるということは、サリーはチョコがバスケットに入っていると信じている、と考えているからであり、それでもなおサリーがそのことを知っているとは認めないことは、なんらかの強い基準を知識に対し、要求しているということである。だがこのことは、誤信念課題にパスする以前から、子供はかなり洗練された知識概念を持っている、ということの意味する。だが、知識概念の分析の中には、可能な状況における主体の信念についての把握を前提するものがある。例えば冒頭で見たノツィックの分析は、反実仮想的状況における主体の信念のあり方、我々の弱い意味での分析(5)は、ラムジーテストに基づく主体Sの可能なあり方、についての理論を前提していると解釈することができる<sup>8</sup>。従って、もしそれが正しければ、ゲティア一例を知識の例と認めないような洗練された知識概念は、信念に対する十分深い理解を要求する、ということになる。そのとき、サリーはチョコがバスケットに入っていると信じている、と思っているのにも拘らず質問2に「いいえ」と答える、といった知識述語に対する特別な配慮は、誤信念課題にパスする（質問1に「箱」と答える）ことができるようになってから、すなわち誤信念をまず正しく理解できるようになった後、あるいは「心の理論」を獲得した後、初めて可能となると考えられる。従って、ここでは経験的仮説として、④や⑦のような場合は排除することにする。

こうして残るのが、②、⑤、⑧であるが、これらはそのまま②⇒⑤⇒⑧という発達段階の順序を示すものとして取るのが自然であろう。すなわち、まず子供は、誤信念課題もゲティア課題もパスしない状態（②）から出発し、誤信

念課題にパスし他者の信念を認識できるがゲティアー課題をパスしない状態(⑤)を介し、最後に両方の課題をパスできる状態(⑧)へと至る、というわけである。

この仮説の意義は、信念概念と知識概念の個人における発展過程、およびそれらの相互関係が経験的に検証できる、ということにある(例えば我々は、質問4に対し、何歳ぐらいから子供は「いいえ」と答えるようになるのか、と問うことで、子供の知識概念が何歳ぐらいで完成する(大人のものと同様になる)か、を経験的に知ることができるであろう<sup>9)</sup>)。逆に、経験的仮説の常として、それがたとえ間違っていたと判明しても、それはそれで、それまで気づかなかった新たな事実を明らかにしてくれるはずであり、作業仮説として十分役割を果たしたと言えよう。

以下では、この仮説を子供の信念概念や知識概念の理解についてこれまで経験的に分かっていることから捉えなおし、それが第一節で検討した「理由の空間」という観点からの知識の分析とどう関わってくるのかを見てみよう。

### 3. 子供の「知っている」の使用と理由の空間

前節で、子供に「知っているか」と質問することの妥当性が問われたが、子供は早くから「知っている」という語をマスターし、2、3歳ではそれが最も頻繁に使われる心的語彙であるとさえ報告されている<sup>10)</sup>。また「見る」と「知る」との間の関係も早くから認識していることが知られており、実際それを確かめる文脈で、子供に対し他者が何かを知っているかどうか、を問う実験が3歳児に対し行われている<sup>11)</sup>。

さらに、子供は早くから自分自身の知識や無知を「理由」として使うことができるという報告がある<sup>12)</sup>。それに対し、自分の知識に対する理由の説明に関して、3歳児は困難を感じるようであり、「なぜ」知っているのか、という質問に対しまともな答えができるのは、4歳以降のことである<sup>13)</sup>。

これと関連して、子供は4歳ごろから、他者の知識に対し「なぜ知っているの？」と理由を自発的に問い始めることが知られている<sup>14)</sup>。このような、他者

の知識の理由（根拠）を問う能力は、自分と違う知識状態を持つ他者にとっての文脈というものを理解するための必要条件であると言えよう。そしてそれを理解することが、知識状態は違えども、「なぜ」そうするかについては理解できる他者、というものを見出す一歩となるのであり、延いてはそれが、他者も自分も属する「理由の空間」を理解することに繋がるのであると言えよう。

さらに、これは直接ゲティアー問題と関わってくるが、子供が「知っていること」と「推測によって偶然当たったこと(lucky guess)」とを区別できるようになるのは4歳から5歳にかけてであり、これも時期からして上の知識の「理由」を問う能力と密接に関わっていると考えられる<sup>15</sup>。このことは、「知っている」場合には（「見たから」「聞いたから」といった）なんらかの「理由」があるのであり、単なる推測には、そうした正当な理由が欠けている、と子供は認識できている、ということである。

実は、誤信念課題において「サリーはどこを探す？」という問いには正しく答えられない多くの3歳以下の子供も、「サリーは最初にどこを探す？」という問いには正しく答えられるということが知られている<sup>16</sup>。従って最初の質問に正しく答えられない子供の多くは、本当はただ単に、質問の趣旨を理解していなかった、という疑いがある。だがこれは、誤信念課題の意義を減じるものではない。

質問の趣旨を理解できないということは、語られた物語の趣旨を理解できないことから帰結していると考えられるからである。サリーの物語は、アンの行為によって、サリーがチョコを探してそれがなくなったと思う、という物語として語られているのに対し、子供は単にそのような物語の趣旨を無視し、サリーがチョコを欲しいなら、結果として、彼女はいつかバスケットを探すであろうし、そうしないとチョコを見つけれないじゃないか、と思っているのかもしれないのである。すなわち、「サリーはチョコを見つかるだろう」したがって「サリーはバスケットを探さだろう」というわけである。

また、通常の誤信念課題をパスしない子供、すなわち誤信念を持つ人の行為を予測できない子供でも、すでに起こった行為なら、それを「誤信念に基づく行為」として理解できることが知られている<sup>17</sup>。このことが示すのは、誤信念課題が明らかにするのは、誤信念の認識能力というよりは、行為に先立つ他者



の内的状態をあらかじめ認識する能力、言い換えれば、(自分の文脈とは異なる)他者に特有の文脈を理解する能力、ではないのだろうか<sup>18</sup>。もしそれが正しければ、このこともまた、誤信念課題にとって「物語の理解」というのが重要な要素である、ということを示唆している。

そして実際、物語をよく理解できる子供であればあるほど、誤信念課題をパスできる確率は高くなることがわかっており<sup>19</sup>、また自閉症児は物語に対する理解が著しく損なわれているということも良く知られた事実である。この意味で、誤信念課題は、子供の何らかの認識能力の発達段階を物語の理解能力を通して明らかにしている、と言えるだろう。

だが、「物語」とはそもそも何であろうか。まずここではそれを「文脈を持つ事態の連なり」と理解しておこう。ではそもそもその「文脈」とはどのようなものでしょうか。それは主人公の不完全な知識状態に対応した順序に配列された事態の連なりではないだろうか。ある場面Aで、出来事Eを知っており、別の場面BでEを知らなければ、AはBの後に来る場面でなければならないだろう。この意味で物語とは、主人公(登場人物)の経験が増していく過程であるとも言える。また、多くの場面は、それに先立つ場面の帰結として描かれる。その時その場面は、それに先立つ場面と「ゆえに」という理由の関係で結ばれているのであり、物語の理解とは、ある出来事が「なぜ」起こったか、登場人物が「なぜ」そうしたか、を理解することである、と言えよう。

ここで再び「理由の空間」という概念が関わってくる。ここでの考察によれば、他者の信念を正しく理解できない子供や自閉症児は、自分のものとは異なる、他者の理由の空間を認識できていない、言わば一人称的な理由の空間の中にあり、未だ正しく(客観的)理由の空間に埋め込まれていない、と言えよう。またその意味で、信念(誤信念)についての理解を獲得する過程とは、個人的(独我論的)な理由の空間が「客観化」されていく過程であると捉えることができよう。

ところで、同じ「理由の空間」という概念を認識論的文脈において重視するR. ブランドムらにとって、それは言語で理由を尋ねたり、与えたりする社会的慣習として考えられており、その意味で言語能力を本質的に要求するものであるが、その結果として、言語を持たない幼児や人間以外の動物は、知識どころ

か信念さえ持たない、とされてしまう<sup>20</sup>。それに対し、ここでの理由の空間は、第一義的には理由の認識能力とその能力の共有によって成立しているもの、と考えることができよう。このような（理由の）認識能力は、確かに極めて「人間的な」ものであるが、それは知の「判断」が他の動物には困難な要素を含むということであり、我々が知識を言語を持たない幼児や他の動物に帰属させることを不当なものとするものではない。

さて、誤信念課題が明らかにするのは、誤信念の認識能力というよりは、物語の理解能力であり、それは延いては、子供の知識概念の発達を、子供の「理由の空間」の発展過程として捉えることができる、ということを見てきた。ゲティアー課題もその延長で捉えることができ、ゲティアー例における信念は、理由の空間から逸脱した信念であると捉えることができる。すなわち、偶然に正しい推測(lucky guess)というものは、一人称的に本人が認識している理由の空間からの逸脱であり（これは4歳児以降の子供は認識できる）、通常のゲティアー例におけるような正当化された真なる信念とは、一人称的には理由の空間の中に正しく埋め込まれているが、三人称的に（客観的に）認識された理由の空間からは逸脱している、と行うことができよう。実際そのような逸脱を検出するとき、人はたとえその信念が真であろうと（真であると信じていようと）それを知識とは認めないだろう。そしてそれは恐らく、理由の空間から逸脱した自分の信念を知識と認めないのと同じ理由からなのである。そのような理由の空間からの逸脱を検出する能力は、理由（の空間）の認識能力を生活形式の中で身に付け、共有することで付随的に獲得されると考えることができよう。こうして先に（第2節で）構成した発達段階についての経験的仮説は、まさに理由の空間の発展段階として捉え直すことができるのである。

#### 4. とりあえずの結論

我々は、ゲティアー課題を通して認識論を経験的探求と繋げることができることを確認したが、これは言わば、「経験的概念分析」であり、このような発達心理学的アプローチは、我々の発達段階の仮説が正しければ、「理由の空間」と

いう概念に基づく知識の分析に対する強力な経験的証拠を与えることになろうし、もし間違っているととしても、これまでの単なる概念分析がなし得なかった新たな経験的事実の発見をもたらすことができるはずである。

H. コーンプリスは、自然主義的認識論が正しければ、認識論は知識を自然現象として直接探求すべきであり、知識概念を探求するものではない、という立場から伝統的な概念分析に基づく認識論を批判している<sup>21</sup>。だが我々のアプローチは、まさに自然主義と概念分析とが何ら矛盾しない、ということを示すものであり、少なくともこのようなプログラムには彼も反対できないはずである。

それどころか、もしここでの分析が正しく、我々の知識概念は理由の空間、そして理由認識能力と深く結びついているというのであれば、理由の関係は(生活形式に埋め込まれた)人間的関心に貫かれている以上、知識そのものは自然現象として捉えることはできないのではないか、という疑いがある。むしろ我々が正しければ、知識そのものでなく、知識概念こそが、発達心理学的観点からまず自然化されねばならないだろう。この意味で私はコーンプリスのアプローチに懐疑的であるが、それとは独立に、ここでこうして理由の空間という概念を持ち出すことで、我々はさらなる学際的研究の道を開くことができるように思われる。最後にこれを手短かに述べてみたい。

理由の空間とは、要するにそれを実現している生活形式のことであるとすれば、それは社会学者や人類学者が三人称的に探求すればよいものであるように思われる。だが一度我々が、理由の認識能力を考察に入れれば、理由の空間がなぜ個人の認識に相対化され、個別化されてしまわないのか謎に見えてくる。特に、理由の関係「ゆえに」が結ぶ関係項のカテゴリーは事実であると言えるが、そのとき理由の関係そのものもまた、一つの事実である。そのような事実を認識する能力は、生活形式の多様性を考慮すれば、すべて生得的であるとは到底考えられない。だが、認識能力一般がそうであるように、それは「誤り」の可能性を常に認める。特に我々は皆、不完全な情報の中に生きている以上、最も細心の注意を払ってさえ、そうした誤りを排除することはできない。だがそれでは、そのような不完全な認識能力を持つ我々は、いかにして理由の空間を共有することができるのであろうか。

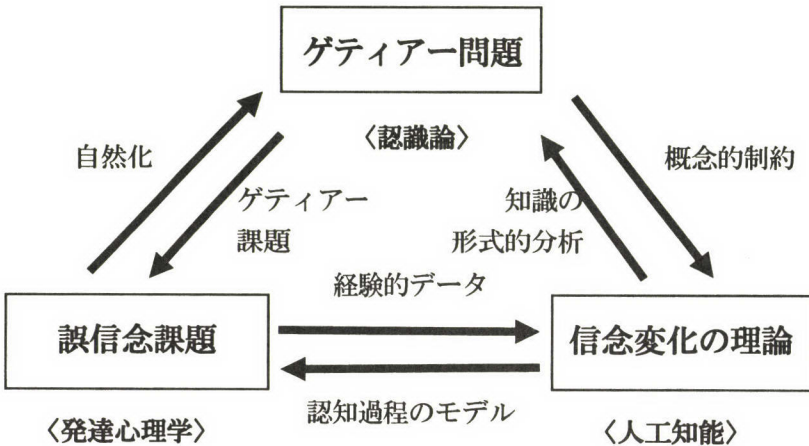
「理由の空間」という考えの重要な点は、それが一人称／三人称の区別を掘

り崩すところにある。もし信念が三人称的に理由の空間から逸脱していれば、たとえ本人がそのとき実際は認識していなくとも、関連する情報を仮に得ることができれば、本人もその信念が理由の空間から逸脱していることを認識できるはずであり、そのときその信念はもはや放棄されることとなろう<sup>22</sup>。このようにして見解の食い違いを片方、あるいは双方の情報の欠如によって説明することでは、すべての見解の食い違いを説明することはできないかもしれない(すべての論争をそれで実際に終わらせることができるとは、なおさら思えない)。だが、少なくとも「食い違い」を有意味にするほどの、お互いが何について食い違っているのか、などの背景的事実についての合意を期待することはできるはずである。とにかくここで重要なのは、我々の推論や主張の背景となる信念は、意識的にコントロールできるようなものではなく、自然に変化するのであり、その意味での自然な(ノーマルな)信念変化のパターンを我々が共有している、ということである。そのような信念変化パターンの共有こそが、理由の空間の共有にとって本質的な役割を果たしているのである。

だがもしそうならば、今や我々は、ゲティア問題を信念変化の理論と結びつけることができる。すでに我々は、(ゲティア課題をパスするような)大人の知識概念には(誤)信念の理解、心の理論が前提されていると論じたが、特に知識概念の分析においては、欲求の要素を考慮せずとも良いため、その文脈における心の理論とは、実質的に信念変化の理論であったと言うことができよう。信念変化のパターンを共有することと、それについての理論を共有することは別のことである(後者が前者に基づくものでなければならぬとは言わない)が、ここでは後者の意味での共有が求められていると言える。単に生活形式を共有するだけならば、およそ行動主義的基準だけで十分であると思われようが、他者とのズレを検出し、他者が予期や期待と違う振舞いをした時にも、なぜそうしたのかを理解できるようになるためには、やはりこの意味での信念変化の理論が必要となってくる。そしてそのとき初めて、単なる振る舞いの一致以上の客観的な理由の空間が確立されるのであると言えよう。

さて、信念変化の理論は、いわゆる AGM パラダイムに基づいて、人工知能の分野を巻き込んで研究が進んでいるが、現在はその形式的性質が主な関心を占め、心理学的、認識論的に説得力ある理論は未だ少ない<sup>23</sup>。だがこれまで見

てきた（経験的概念分析という）自然主義的アプローチによる認識論と発達心理学の学際的協力は、信念変化の理論に対しても、人工知能単独の研究では見えてこなかった様々な制約を提供するであろうし、逆に説得力ある信念変化の理論が構築されれば、認識論や心理学はその形式的研究から多くを得ることができるだろう。従って、ここまでの考察が正しければ、理由の空間という概念によって、これら三者の研究領域の間には以下の図に示されるような、真に実りのある相互交流を実現する学際的かつ具体的研究プログラムが切り開かれることになるはずである。



注

<sup>1</sup> Nozick (1981), pp. 172-178. (3), (4)の“ $\Rightarrow$ ”は反実条件を表す。(従って、(3), (4)は仮定法条件文。)ただ、これらについて(3)は「pが成立していない可能世界で現実世界に最も近いものでpと信じていない」ことと標準的に理解されるが、(4)は現実世界において実際pが成立していると考えられているので、この文の意味論の正確な定式化には困難がつきまとうはずである。だがここではそれについて触れないことにしておく。

<sup>2</sup> 例えばスミスはジョーンズが車を運転しているのを見て彼が車を持っている、と信じたとする。だがその車はたまたまジョーンズがジャクソンから借りていた車であった。そ

のときたとえたまたま本当にジョーンズが車を持っていたとしても、ジョーンズが車を  
持っているゆえにスミスはそう信じているのだと言うことはできないだろう。

- <sup>3</sup> だが実は、ここではすでに、q ゆえに S は q と信じている、ということが暗黙のうちに  
前提されており、こうした説明は本当は余計なものである。しかしそれでもこの説明は  
(5)の理解のために役立つであろう。
- <sup>4</sup> すなわち、この弱い意味での(5)を条件文を使って分析したものは、((3)、(4)と異なる文  
となるが) 直説法を使う文となるはずである。私は別のところで、実質的に以下のよ  
うな文による分析を提案した。(Mizumoto (2003)、水本(2004))

S knows that p iff

(1) S believes that p.

(2) There is no fact q such that (S believes that q  $\Rightarrow$  S does not believe that p).

ここで“ $\Rightarrow$ ”はノツィックの定義と同じく反実条件であるが、S が p と知っているかどう  
かと関わるのは、この世界で q のようなものが実際に成立しているか否かであり、S の  
観点からは、(2)はラムジーテストのような役割を果たすという意味で、“If q then not-p.”  
という直接法的条件文を受け入れるか否かという問題として理解されよう(ラムジーテ  
ストおよび直説法と仮定法の違いなどに関しては、Bennett (2003)参照)。この意味で、S  
にとって p であることは、もし実際に q のようなものが存在しないならば、二次元様相  
論理の意味論の文脈でチャルマーズが「必然性 1」と呼んだ意味で (Chalmers 1996, 第  
2章4)、必然的であるということになる。

- <sup>5</sup> ノツィック (およびドレッケ) は、このことの破壊的な帰結を避けるため、知識は (知  
られた) 推論関係に関して閉じている、という前提を放棄することを提案する。ここで  
はそのような戦略の是非は問わないが (その詳細については戸田山(2002)の第7章が分  
かりやすく解説してある)、我々の上の分析が正しければ、少なくともそのような譲歩  
は必要ない、ということになる。
- <sup>6</sup> ただし、一時期言われたように、これが自閉症児に特有の症状であるとは今日考えられ  
ていない。というのも、生まれつき盲目の子供や耳の聞こえない子供も、同様に誤信念  
課題に失敗する傾向があることが知られるようになったからである。
- <sup>7</sup> 典型的なゲティア一例は、註2を参照。
- <sup>8</sup> 註3参照。
- <sup>9</sup> もちろん正確には、これは(少数の)大人でさえ「はい」と答える可能性を考慮に入れ  
ながら、一体何歳ごろから大多数の子供が「いいえ」と答えるようになるか、という問  
題として捉えられねばならないだろう。
- <sup>10</sup> Shatz, Wellman, and Silber (1983). これも含め、以下の心理学の文献については、Perner  
(1991)の第7章、Mitchell (1997)の第7章、8章を参照。

- <sup>11</sup> Pillow (1989)や Pratt and Bryant (1990)参照。
- <sup>12</sup> Hood and Bloom (1979). 例えば、2歳11ヶ月の子供が、「読み方知らないからこれ読んで(Could you read this to me cause I don't know how.)」という具合である。これは「知っている」が能力として使われているが、事実についての「知っている」という使用も2、3歳児から見られることが報告されている。
- <sup>13</sup> Wimmer, Hogrefe, and Perner (1988). また、Gopnik and Graf (1988)の実験は、子供が自分の知識がどのような知覚様相を通して獲得されたか（例えば「見て」知ったのか「触って」知ったのか）を正しく答えられない、ということを示している。すなわち、子供は自分が「なぜ（いかに）」知ったのかを認識していなかったのである。
- <sup>14</sup> Perner (1991) pp. 158-60.
- <sup>15</sup> Perner (1991) pp. 156-8. 残念ながら、Perner らの実験は、子供に自分が知っていたのか、推測したのか、と問うものであり、ある状況における他者が知っていたか、推測したか、を答えさせるものではない。だが、誤信念の認識能力についてのデータから、子供でもそのような能力に一人称/三人称の非対称性はない、ということが予想される。
- <sup>16</sup> Siegal and Beattie (1991).
- <sup>17</sup> Robinson and Mitchell (1995).
- <sup>18</sup> ただし、子供は自分自身の過去の誤信念に関しても正しく認識できない、という結果もあり（スマーティー課題）、これは物語の理解能力とは直ちに結びつかないように見える。だがこれは、むしろ「私」概念そのものが、自らの過去の誤信念も引き受けるデネット的「物語私」となる契機として誤信念認識能力を要求している、ということを示すものかもしれない。その意味で誤信念の認識能力と物語の理解は、(1)一人称の誤信念認識能力⇒(2)新しい「私」概念⇒(3)物語理解能力⇒(4)三人称の誤信念認識能力、という発達段階を辿るのかもしれない。
- <sup>19</sup> Saltmarsh et. al. (1995). またこの相関は年齢とは独立であった。
- <sup>20</sup> Brandon (1994)、このような立場に対する批判は Kornblith (2001)参照。私もコーンブリスの見解にほぼ同意する。
- <sup>21</sup> Kornblith (2002)、第1章参照。
- <sup>22</sup> ここではもちろん主体の合理性が前提されているが、それはあくまでノーマルな（あるいは自然な）信念変化のパターンを持つ、という意味での「自然な合理性」である。
- <sup>23</sup> このような認識論的観点から説得力のある信念変化の理論を目指した体系として、Mizumoto (2003, 2004)参照。

## 文献

- Bennett, J. (2003), *A Philosophical Guide to Conditionals*, Oxford: Clarendon Press.
- Brandom, R. (1994), *Making it Explicit: Reasoning, Representing and Discursive Commitment*, Harvard University Press.
- Kornblith, H. (2002), *Knowledge and its Place in Nature*, Oxford University Press.
- Mitchell, P. (1997), *Introduction to The Theory of Mind: Children, Autism and Apes*, London: Edward Arnold Limited. (邦訳：『心の理論への招待』、菊野春雄、橋本祐子訳、ミネルヴァ書房、2000年)
- Mizumoto, M. (2003), *A Theory of Knowledge and Belief Change: Epistemology Psychologized based on the Naturalized AGM*, written as a doctoral dissertation to be submitted to Hitotsubashi University.
- Mizumoto, M. (2003a), "From Information to Fact : A Theory of Belief Change", *The Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, Vol. 11, No. 2.
- 水本正晴 (2003) 「マトリックス世界はリアルか? ——チャルマーズによる懐疑論への形而上学的解答」(単著)『現代思想』第32巻第1号。
- Mizumoto, M. (2004), "A Simple Nonmonotonic Logic as a Model of Belief Change", *The Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, Vol. 12, No. 1.
- Nozick, R. (1981), *Philosophical explanations*, Cambridge, Mass., Belknap Press.
- Perner, J. (1991), *Understanding the Representational Mind*, Cambridge: MIT Press.
- Pillow, B. H. (1989), "Early understanding of perception as a source of knowledge", *Journal of Experimental Child Psychology* 47, 116-29.
- Pratt, C. and Bryant, P. (1990), "Young children understand that looking leads to knowing (so long as they are looking into a single barrel)" *Child Development* 61, 973-82.
- 戸田山和久(2002)『知識の哲学』哲学教科書シリーズ、産業図書。
- Wimmer, H. and Perner, J. (1983), "Beliefs about beliefs: representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception", *Cognition* 13, 103-128.

(みずもと まさはる／都立大学・学術振興会)